



大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和8(2026)年
8月号
通巻672号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和8年8月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



広島県豊田郡大崎上島から長島を望む

(中本好子さん撮影・文8頁)

座談会・法主を囲んで(再編集版)

みそぎ 禊を通して生き方を考え直す(第5回)

法主 矢追日聖(満64歳) 他

この座談会の連載も今回で5回目になります。座談会そのものは昭和50年7月1日に実施されたもので、それからもう約半世紀が経過していて、大倭を囲む時代の状況も大きく変化しています。座談会参加者のうち、法主はもうこのこと、森下新蔵さん、水野勝美さん、岸野春子さん、青山日元さん、矢追鈴月さんはすでに帰幽されています。

今回の座談会の前半は社会福祉に関するものですが、この間にわが国の社会福祉制度のあり方も、特に社会福祉施設の運営に関しては激変しており、法主のその面についての発言もわかりにくい側面があるかもしれません。でも、あえて社会福祉に対する法主の姿勢を知っていたくことは意味があると考えて、未発表の部分もテープ起こしをして掲載することにしました。

今回の連載のメインテーマである「禊」は奥深い広がりのある課題ですが、半世紀を過ぎても色あせない内容があると思いますので、じっくりと読み込んでいただければさいわいです。
(編集部)

行政福祉を超えて

法主 これだけ福祉行政で網を張って費用をたくさん使っても、それにはまらな者を施設で採ってやらなかったら、その家庭が自滅するっていう家がずいぶんあるねん。大倭でもな、いわゆる私的にそんな人を入れてやって、ややこしい枠で国からハメられずに、こっちで自由に

ここで一緒に生活していくというような、そんなものがなけりゃいかなって思う。今日来た人もそんな人やな。明日来る人もそんな人やな。

明日はどこかの施設で具合が悪いというケースと、もう一つ東京から聾啞(※聴覚言語障害)の子のケース(※故中村昇次さん)で相談に来るねん。そやから明日2組東京から相談にやって来るねん。

鈴木 別にここに置いてくれとか、そういうことと違うねん。そういう子がどうしたら落ち着けるやろうかと探してはるわけや。その子に合う所どつかに無いやろうかと思うて。

法主 最近そんなケースが何や知らんけど寄ってくんねん。妙になあ。それはいわゆる大倭の宗教の側から言うても、こっちの方で何とかして、その家庭に幸せになつてもらおう、そんな行き方自体がここの宗教のあり方なんやけどな。

森下 やっぱり世間一般にある福祉は、まあ、営利出したらいかんねんけどな、内容は営利がやっぱり大半しめとるわけや。せやさかいに扱いやすい世話のかからん者を、どうもみんな採ろうというような。

法主 その営利言うたって福祉施設は儲けはないねんけどな。なんていうか、経営しやすいような方法を探るわけや。仮にうちみたいな最重度の子を扱こうても、もつともつと楽に扱かえる子を扱こうても、事務費とか生活費などの措置費は、同じように金はいくらねんもん。(※この時代の障害者福祉は、現在のような契約制度ではなく、措置費制度だった)そしたら同じやったらちよつとでも軽い者採ってやったら職員も楽やし、経営は楽やしという、やっぱりそういうふうになつてくるのや。経営を主体に考えよんねん。それで結局施設を満床にしたら、仮に重度の者が来たから

いうてもうちは満床やから入れることはできないと、体裁よう断れんねん。

まあ東京の方は極端やけどな。ベッドが空いてるねんで。空いてるねんけど入れよらん。これは一種の運動やわな。

というてわしは決してそれを悪いと思わへん。東京のおひぎ元の一部の社会福祉の施設で、仮にベッド50も空いとったかて、そこでもう入園者を入れへんと。それで職員の方が入園者よりも多いんや。現実にはそういう施設があるわけや。

それは見ようによつたら、福祉の精神からけしからんと言うかもしれんけれども。私にしてみたらそれもあつてもええと思う。こんなこと言ったら悪いけど。

というて、うちらの場合やつたらね、ここ(※菅原園)に54人入つてるやろ。それやつたらこんなもの1対3の寮母みたいなもんで、労働基準局がやかましゅう言うてきて、8時間労働で働くもんの待遇とか言うても、やっぱり24時間の仕事の対象が入つとんねんからね。夜もほつとけない、夜勤もあるから。そうしてみたら8時間労働やつたら3つの区分になるわな。3交代。ほな3交代だけの職員を確保してたら、きつちり夜も昼も同じようにいける。

ところが配置基準というものは入園者が3人に對して寮母さん1人となつていて、労働基準局からは厳しく労働時間や休日、休暇のことを言ってくるし、それにこつちが合わそうと思つたら1対3ではとつてもやないけど足らんわ。

国も費用の点はあるやろうけど。それをヤイヤイ言うたかつて予算がこんだけというて、結局大蔵省(※現在の財務省)が抑えよる。厚生省(※現在の厚生労働省)みたいなもん弱いからあかん。

医療関係なんかみてみいな、病人扱うとるさかい、あんなの大臣がガーンて言いよつたら大蔵省はいつべんに言うこと聞きよる。また、あこらはバーンとストやりよるもん。そんなん医者とかが職場放棄とかしたら、アップアップ死にかかつとる患者を皆ほつたらかしよつたらかなんがな。人権問題になつてくるやろ。

けど、福祉のこんな施設に入つてる人のことやつたら……。やっぱり福祉施設で働く人とか、やつてる人はある程度宗教的な、精神的な人が多いわけやねん。それを大蔵省は見とる。そこまで入つてる者をほつといてバーンと職員がストみたいなもんやらんと思うとる。医者やつたらやりよる。事実やりよるもん、医者は。

そやから弱いと見とるからなかなかこつちがヤイソカヤイソカ正攻法でなんば正面から行つたかつて、言うことめつたに聞いてくれよらん。

そういうことになつてくると、全国の広い数のある中で、東京のその施設みたくに、バーンと切つてもうて、入園者の方が少ない、職員の方が多い。あれやこれや言われながらも、それで東京の足元で頑張つとんねん。

現実見たら1対1にして欲しい。この前、全国大会の時でも意見聞かれた時に、少なくとも菅原園の場合は、どうしても1対1にして欲しいとはつきりとわしは発言してる。それはなかなかならんけど、その施設は実力でそれやつてもとるねん。受入れよらんもん。頑張つてもうて(笑)。だから一応そんなものがあつてもええねん。他のものは思つておつたかてようしない、側面から見ても、あんだだけ東京のお膝元で革新知事やから、そこにつけ込んでやで、あれ頑張つとんねん。わしはえらいやつちやなと思うてな。また反面いつも感心して見とる面があるねん。今の時代はその

くらいやらな。

あんなんもあつてもええと思う。しかもそれ東京の膝元やから効果あると思う。九州や関西あたりでやつたとしても効果あらへん。そうするとやっぱりそういうふうな実情をなんとか国も打開せなあかんと思うとやね、そこを一つ解決したら、全国一律右へならえで行きよる。例えば今、3対1やろ、仮に2対1になつてもええやん。そうなたら全国の療護施設全部2対1に変えよる。まあ見ようによつてはな、きつい行き方はしよるけれども、まあみんなやつぱり犠牲的精神でやつてくれてんたという、そういう見方もあるし。

そこに入ってる子は、ちよつとかわいそうやなと思う。職場放棄やりよるさかい。まあかわいそうやなと思う面もあるしね。まあそれはどつちから見たって功罪相半ばやな。けど、よその施設では思い切つてやることはいわ。さっき言うた今日相談に来た、明日も来る、そんな人らが、こんだけ行政的に整えてんねんけども、漏れよんねな。だから行政の中で作つた施設だけではあかんと思うねん。

ほんで、せめて大倭なんかで、そういうこぼれる人をやな、こでまた一緒に家族として生活するようないことがあつてもええと思うねん。うちの家族のものがやで、職員やなしに、家族として、どつか建物もちゃんとあつてやで、そんな子ばかりと誰かがそこで1人とか2人とか3人とか、責任持つてそこで一緒に住まいしてやつて、まあ生活するとうような。これは宗教のことやたらええねん。それ宗教の仕事としてな。最近あんまり相談きよるからな、痛切に思うねん。

だから、うちの3施設(※当時は3施設だった)で入れるような場合は施設の方でええねんけどね。やつぱりね、どんな子も居るが。そんなこと

どうもわしは計画は嫌いだけれども、こんなことしてやらないかんような時期が来たんじゃないかとうような、この自然の動きと言うかな、最近ちよつとそんな気持ちになりつつあんなねんけどな。福祉の話しになつてしまつたけれど、禊の話に戻そうか。

ふるたま ことたま 振魂や言葉について

杉本順一 禊という事で、法主さんの話から僕ら自身ある程度、言葉としては納得出来る面もありましたけれども、その本質的な目的をもう一回聞いてみたいのですが、禊会ということからいけば、法主さんが振魂を取り入れられたところあたりのことをです。振魂と言うのは、法主さんの話だと古代人の一つの禊の方法としてあつたということでしょう？ 葉みたいに飲んだから効くいうのではないけれども、それがどういふことなのか、もう少し聞かせてもらいたいと思います。めつたに古代人が河原に集まつて禊をするのに、言葉で研鑽するという禊はあんまりやつてなかつたやないかと思うんです。善悪感とは一体なんだろうか、とうような禊を果たしてしたかということになれば、ちよつとこれはようわからんし。

法主 そういう禊は現代流や。
杉本 でしょ。としたら、その中で法主さんがその振魂を持出されたことが、僕ら自身とどんなところで結びついてるかということ無理屈だけになるかもしれないけど、あとはやはり個々人自分の体験でそれをまた納得すればええわけですけども、お話を聞かせてもらえたらと思うんです。

法主 本当の禊となつてくると、やつぱり振魂が主体やねん、本当は。けれどもまあ今、現代社会においては、知識というものがあまりにも普及し

てるわな。きょうび高等学校位までは義務教育に近いとこまでいつてるし、また大学に行つて、知識としてはもうヨーロッパから始まつて、世界の知識を吸収している。だから知識偏在のような世の中になつてきていて、人間は本来のその本質的なものが案外忘れかけてるんじゃないかとわしは思うんや。

まあこの禊をやつたらということには自分でも賛成した。やつてもええやないかということやね。これは古代社会がやつたから真似すると言うんやない。人間そのものは一万年後も今も一緒やと思うねん。人間の本質は。

けれども、生活様式が変わり知識もだんだんといふてきておるから、いろんな変化はあると思うねんな。けど、本来の人間の本质においては、これは昔も今も変わらんと思う。一緒やねんな。

そこでもつて思うのは、その知識があまりこの人間の脳の機能の中を占領してくると、人間本来持つておつた感応的なもんがだんだんと忘れられていくやないかと。やつぱり使うところは発達するが、使わんとところは退化するのと違ふかうような思いがあんな。

ところが、古代の人の言葉から聞けば、我日の本は「言挙げせぬ国」という言い伝えがあるねんな。言挙げせぬ国ということば、あまりべちゃくちやべちゃくちや言葉に出さないとやう意味やと思うねん。言挙げはせんと、言葉には出さんと。だからして、その日本には昔は今で言うような法律とか、その言葉によつてどうこうとかね、あんまりそういうようなものは無かつたと思うんやな。

そやから神さん拜むにしても、今のうちに祝詞みたいなものをこしらえて、声出して、かけまくもかしこみ……そんなこと言うてるけれども、日本

の古代の人は言挙げしないねんから、おそらく祝詞やかお経をあげるとかいうことはなかったと思う。

ところが、その言葉に対して、もう一つの言葉が「言霊」なんや。言霊の幸わう国。人間の作った声を出している言葉やなしに、言霊でもって、咲き誇っていくとかいうか、繁栄していくこの国であると思う。この日の本はね。

犬でも猫でも言霊があんねんから。ウオーっちゅうあの中にも言霊が働いとる。意思の表現とか、ご飯食べたい時には、うんうんあんんって言うとするわ。犬のワンというのね、猫のニャンちゅうのね、鶏のコケツコーちゅうのね、その中にはみんなその心の表現があんねんな。声が無かったかて、それを言霊って言うねん。言霊が現在わしが喋っておるように言葉に変化させておるだけやわな。

だからそのいわゆる心の気、言霊でもって、日本は栄えていく国やと。まあ、こういうように言い伝えてきてる国やわな、日本は。そうすると言霊でもって、日本は栄えていく国ということになつてくれば、言葉使わないところで、人間が錬成というか修養というかな、そうしていかなきゃ、日本人は栄えないと。そういうと理論闘争とかはいらんわけやな。ほんま言うたら。口に声だしていろんなこと言うことは日本人には必要がないと。本当にみんなが幸せになっていこうと思ったら、言霊でいけというわけやな。

そうすると言霊でいくとなつてくると、その方法は裸になつてくる。自分の現在の知識や、現在の意識とか色んなものが脳のほとんどを占領しているかも知らんけど、一応そういうものが抜けてしまおうと——抜いてしまおうと言うか、今の言葉というたら精神統一というかな——、そうすれば

自分の持つて生まれた人間としての本質的なものの動きが出てくるねん。それで自分の意思やなしに自分の本質的に持つておる意志の出でくることが言霊やねんな。意味が無しでポコッと出てくんねん。それは言葉に変化させてもええねんで。今やったら現在言葉として喋ってるねんけど、この言葉が無かったかてその言葉に表現していくような心の動きを言霊というねん。

だから、結局、その言霊で幸わう国というように言われておるんやから、自分の現在意識や全ての諸々を鎮めて、一つのものに心が統一した時に、自分の本心の動き方、働きが出てくる。それが本当の言霊やねん。

それは動作で出てくるか、あるいは言葉で出てくるか、形はその人によって違うんやけれども。自分が右やと思ってるのに、同じ自分の口が左やと言ってしまうような場合があるねんな。ということ、現在のその認識、意識で、これが正しいんやと決めつけているものが仮にあったとしても、いわゆる入神状態とか、いわゆる振魂ちゅうやつやね。その振魂っていうのは、肉体を宿ってから今日まで育成してきたおる自分の生命体の意思を出しよるんやわな。意思の発現やわな。そうすると、自分の現在思っている感覚の裏返しが出てくる場合もあるねんな。自分が右に行こうと思ってるのに、あるいは左に行かしよるかもわからんし。

そうすると人間本来の個々の、その人が持つてきた本来の姿というものは、振魂を通して自分に分かると思うんねん。だから先生も何もいらんわけや、教えることも必要ないのや。自分で自分の本心が、現在の自分を教えるんやから。だから一つの定まったお経みたいなものや經典みたいなものは必要ないわけや、書いたものも必要ない。言

葉も必要ない。また、師匠も必要ない。そこまでいくと、自分で自分の本心が現在の自分を教育しよんねん。振魂のそうしたいき方が一番いいんやろうと思う。

仮に、昔の人達がみそぎをした時には、ただ黙して加美さんと自分、つまり自然の気と自分の気とを一つに結びつける、その念ひとつやったと思うねん。

そうすることによっていろんなものが出てくるねん。だから今まで自分が自惚れとったやつは、お前は間違とるということを自分でわかるやろうし、お前はこうせないかんっていうことを人から言われるんやなし、自分で自分に言うて聞かしよるし。そうしたことが今の社会には、抜けてるから、知識を中心としたものの考え方、合理主義的なものの考え方、万人さえ納得したらええやないかと、それが一番正しいんやというような考え方になつてしまっている。

また、法律をつくつて、それに従う者は正しい、逆らう者は罪やから罰すると、人間社会はそういうことで出来ていて、そういう人間の尺度からみたら善も悪もはっきり区別できるわけやけれども、その本質的なものになつてくると、善も悪もないわけやな。それで、その自分にそうやって決めつけられたものは、これは自分が決めつけてるんやなしに、生まれながらに自分に定まったものがあんねん。

(続く)

法主・言の葉



ものに好き嫌いのある人は、本当に誰とでも仲良くなれるものではない。好き嫌いは差別偏見のもとである。

あじさいの花々(第3回)

—教務本庁2階

齋藤 正宏

いつの始まり

20年ほど前、まだ大倭会館が旧館だった頃の話である。祭典後の直会(なほひ)が何かで、部屋(いむら)いっぱいの人々と会食した折、近くに座った青山法義さんや治郎丸明穂さんと、法主さんが残された録音や映像記録の話になった。

新しい教務本庁はできていたが、法主さんの記録類は未だ保管のみの状態とお聞きし、墨の入れぬ白目のダルマを連想した。

3人の話の中で、青山法義さんが、法主様からの話として「大倭ではまだ食べるのも満足にできていない頃に、写真のフィルムを買って記録してたのを、おかちゃん(鈴月母さん)はそんなものを買うよりお米の一升でも買って欲しいと思つたとおもうで」と聞いたと話された。

そこまでして残そうとされた記録ならば、何とかして紐解いてみたいものだと思つた。

そんな話になった時、近くに大きな雷が落ちた。しばらくの沈黙を経て、これは議論することではなく、実現するための試みを始めるしかないことなのだという雰囲気になった。

手探りで始めた録音編集

オープンリールテープに録音された記録を再生・編集するには、既に販売終了となっていた専用のテープレコーダーを入手する必要があった

が、インターネットが使えり時代になっていたため、これを活用して中古の機材を揃えた(※註)。次は、再生されたアナログ音声コンピュータに取り込み、デジタル編集する環境を整えていく。音声編集の専門書を読みながら進める、初めての挑戦であったが、アルバイトで鍛えたコンピュータの知識や経験が役立ってくれた。

また子どもの頃から、オープンリールのレコーダーやコンピュータに触れる機会に恵まれていたことも大きな助けとなった。エンジニアだった父に感謝である。

こうした模索を経てよみがえった録音には、昭和30年代の若々しい法主さんと邑人たちの息づかいが記録されていた。

日々の禊という役得

私事になるが、ここであつたと当時の私の心境についても触れておきたい。

認知症で「せん妄」や「徘徊」が始まった祖父母に加え、パーキンソン病で寝たきりの父を、母と一緒に自宅介護するうち10年あまりの年月が過ぎていた。仕事も辞め、子どもたち相手の小さな塾と、独学で身につけたコンピュータ作りやプログラミングの技術で生計を立てる日々であつた。

何とか自分がやれることに専念する毎日であつたが、同級生たちが家庭を持ち、子どもを授かったりする姿を見るにつけ寂しい思いをしていたのも事実である。様々なひがみや邪念に傾きがちな自分が最も苦しく思える時期でもあつた。

そんな私にとって、生業や介護の合間に聞く法話は、日々の禊であり、救いとなつていった。

父が亡くなつてしばらくした頃、杉本さんを通して父からのメッセージが届けられた。「死んで

からわかつたけれど、大切な仕事をしてたんだよ。おかげでこつちまで明るく過ごさせてもらつとるで」とのことであつた。この時初めて、ご先祖さんや所縁の人々も一緒に法話を聞いていたんだと悟つた。

映像保存の機材を手作りする

音声は磁気テープで保存されているが、8ミリの映像は写真形式で保存されるため、時間の経過とともに表面の乳剤が劣化し、テープどうしが貼り付いてしまつたりする。30年以上前のフィルムから発せられる酸っぱい匂いは再生の限界を迎えつつあることを意味していたが、これをデータに変換するにはどうしたらよいのだろうか？

かなりの難問であつたが、インターネット上の事例を探すうち、テレシネ方式という技法があることを知つた。古い8ミリ映写機で再生した映像を、幻灯機の仕組みを応用して映し出し、それを



◀ 教務本庁の概観



▼ 2階の内部

ビデオカメラで撮影・保存する方法である。

しかし、そのための機材など市販されてはいない。大倭の太工の山崎さんをお願いして精密な木箱を作ってもらい、その中にスクリーンと鏡を仕込んだ変換投影機^{プロジェクター}を自作した。

8ミリフィルムの映像を再撮影し、保存する作業は、杉本さんが担当してくださった。

それからさらに10年あまりの歲月が流れた最近

法主をめぐる四方山話(一)

よち やまばなし

新たな企画として「法主をめぐる四方山話」というコラムを始めることにします。

現界の法主や霊界の法主も含めて、法主に接した経験や小さなエピソードを語っていたことでジグソーパズルのように矢追日聖法主像を作っていたらと考えたのです。

現界の法主に接したことのある人たちが少しずつ減りつつある中で、貴重な記憶を記録に残しておきたいという切実な願いもあります。あまり肩のこらない気楽な話も歓迎です。(編集部)

法主さんからの贈り物

杉本 順一

私が「宗教」という言葉を意識して考え始めたのは、大倭紫陽花邑に入門(昭和39年6月15日)してからです。

大学時代は「神さん仏さんなんて糞くらえ」の世界でした。

入門したころは毎晩のように瑞光院の茶の間にお邪魔して宗教的なことはどんなことか知りたくて、自分の思いを好きに喋らせてもらいました。

は、映像データを記録・保存したDVD・R自体が寿命を迎えつつあるため、デジタルデータを抽出し保存する作業が進行中である。

オープンリールテープの形で残された録音や8ミリ映像の大半はデータとして変換・保存済みだが、時折、カセットテープも含めた古い記録が大倭某所にあつたと教務本庁に届けられることがある。本紙デスクの岸田哲さんが、宝箱でも見つけ

ある晩法主さんが、そんなことを考えているんやったら、「法華経」の「寿命品^{じゅみょうほん}」を読んだらいいと教えてくださった。私はハイとお答えしたものの、いきなり仏教の経典に気持ちはいかずそのままでした。

それから32年ほど、法主さんが帰幽されたのが平成8年2月9日です。

法主さんが帰幽されてから、私は毎朝拜殿に足を運びました。

拜殿に飾られた「聖徳太子さんの絵」の前でも挨拶するようになったある朝、いきなり法主さんの声で「ジュリヨウホンヨメ」と言われました。

生前の法主さんは命令はされなかったが、この時は間違いなく「寿命品^{じゅみょうほん}を読め」でした。

早速本屋さんで、(岩波書店・中村元著『仏典をよむ』全4巻)を買いました。

早速寿量品を読みました。

中村元さんの解説文を読んで、釈迦牟尼のお話として素直に受け取ったつもりでした。

それから20年ほどたったころ、いきなり「ヒノヒジリワコユウレイニアラズ」(日聖は固有霊にあらず)と法主さんの声が聞こえてきました。ここまで来てやっと仏教に言う「久遠の本仏^{くゑんほんぶつ}」と「日聖固有霊にあらず」が一つになりました。

たかのように目を輝かせる一瞬である。

大倭の多宝塔^{たほうとう}

現在、大倭の教えに触れる機会としては、本紙や法主さんのご本をお読みいただくか、祭典に参加されて法話の録音をお聞きいただく、もしくは教務本庁を訪ねていただくなどの入口が用意されているが、今後は、法話のインターネット配信などという道も必要になってくるのかもしれない。

しかし、まずは法主さんの記録を囲む、学びと語らいの場を開くこと、若い世代も含めた人育ての機会を生み出すことが大切だと思われる。

昨年の暮れに、若手の大倉有宏^{おおくらひろ}さんと相談しながら、これまで編集作業中心だった教務本庁2階部屋の机や本棚を並べ替え、ゲストを迎えられるよう模様替えできたことは嬉しい一歩であった。

大倉さんは、これまで本紙に掲載されてきた記事データベース化する作業も進めてくれている。これが完成すれば、法主さんがいつ頃、どのような言動を残されたのか、検索できるようになりそうである。高齢化が進む大倭ではあるが、若い息吹の胎動を感じた時間であった。

教務本庁の2階部屋が、来客をお迎えし、法主さんの歩みを紐解きながら、気軽に語りあえる「学びの場」となる日が楽しみである。

最後に、杉本さんを通して、法主さんから「教務本庁は大倭の多宝塔」とのお言葉をいただいたことを付け加えておく。

(註) 編集用コンピュータの作成や機材の調達にあたっては、様々な方からの賛同やご支援を賜りました。この場を借りて、御礼を申し上げます。

新たな出発点に立って

紫陽花邑 青山 法義

本紙5月号に「機会があれば」と書かせていただきましたが、早くもその機会を頂きました。

今年の7月から奈良市立の学童保育の仕事を始めました。モノ作りから人育てへと大きな環境変化に、毎日が手探りで先輩たちに注意をされながら児童と楽しく過ごしています。とはいえ、現代社会における家庭環境の問題や、発達障害を抱える児童の多さに改めて驚いています。

この仕事に就こうと思ったのは、私がまだ二十歳前後の頃、休みの日になると子どもたちが大倭印刷の2階(※当時男性の独身寮だった)の私の部屋に遊びに来ていて、一緒に遊んでいたのが一番大きなきっかけだったかもしれません。

その後結婚し、子どもが生まれ、夫婦共稼ぎだったため、保育所に子どもを預けていました。保育所に毎日お迎えに行き、挨拶を交わすだけのお父さんができ、子どものおむつ替えを2人並んでしていました。そんな中で、「顔を合わせてあいさつするだけか……寂しいな」と頭の中で思うようになり、思い切った声を掛けてみました。それが縁で、3家族が休みの度にどこかの家に集まったり、時にはキャンプに出掛け、大家族のように子育てを楽しんでいました。この輪をもっと大きく出来ないかと、クラス便りを出すことに。保育所を巻き込み何とかクラス便りを発行しました。この背景には子どもの頃に交流の家のガリ版を使って作った「子ども新聞」の経験があり、大倭印刷での仕事のスキルアップにつなげられればと、クラスの家族紹介を中心とした取材や原稿づくり

を行い、これが功を奏してこのクラスの絆はとても強いものになりました。冬はバスをチャーターしてスキーに出かけたり、普段の休みには車に乗って大きな公園に子どもたちを連れて行き、自分子どもだけでなく、みんなが親の役目を果たし、また、子育ての悩みを誰にとなく相談されたりすると、誰かが、「そんなの本に書いてあるだけで、標準的な事しか書いていないから、それぞれの子どもの成長は違うんだから悩む必要なんかないよ」と答えが返ってくる。すると悩んでいた親の表情が明るくなるなどの一面もありました。

少し話はそれてしまいましたが、このような背景から、いつの頃からか印刷の仕事離れたら、児童に関わることをしたいと考えるようになりました。しかし、保育士資格もなければ、教員資格も持っていないので、かなりハードルは高いと思っていましたが、これまた娘の縁で、自治会の子供会の役を引き受けたのがきっかけで、奈良市委嘱の「少年指導委員」や奈良市が各小学校区に委託している「子ども居場所づくり」の会長、民生児童委員などを歴任していたお陰で自分が思っていたよりハードルが下がってくれたようです。

今年の6月初旬に採用通知が届きましたが、配属が決まらなかったのが不安な日が続きましたが、月末近くにはやっと配属通知が届きました。希望していたところではなかったのですが、後日採用担当者の話を聞く機会があり、私が子どもに寄り添う活動をしていたことがこの配属になったとのことでした。

この学童保育のホームには約60人ほどのお子さんが登録されていますが、その中の10人位が何らかの問題を抱えている子どもたちです。ある1年生は自分の世界を持ち、人からこうしよと言われると動かなくなり、しばらくすると外に出ようと

する。このホームに行きだしてすぐの頃、「この子は人見知りで……」と聞かされていたのでつかず離れずの距離を置いていたのですが、ある日別の1年生とKLACK(色のサイコロ、形のサイコロの2つを振って、指定された色・柄が書いてあるマグネットを速い者勝ちで取るゲーム)で遊んでいるとその輪の中に「僕と先生チーム」と言ってゲームに参加してきました。普段あまりしゃべらない子なのですが、この時は大きな声で楽しそうにみんなと遊んでくれました。その後夏休みに入り、私は午後出勤で、子どもたちがお弁当を食べ終わった頃に出勤すると、その子が黙ったまま私の手を引いて自分の席に連れて行きます。その姿を見ていた他の先生も驚いていました。今後この子との関わりがどのようになっていくかがとても楽しみです。

また別の子ですが、本読みの時間になっても本を読まずに、座ったり、寝転んだりします。学童のルールで寝転がるのはお昼寝の時間だけ(1、2年生。それ以上は希望者のみ)です。注意してもまたすぐに寝転がってしまいます。この子は何か初日から私のことが気になっているようで、主任先生が「○○ちゃん、のんちゃん先生に興味津々やな」と声を掛けていました。ちなみにホームでの私の呼び名は「のんちゃん先生」が多く、一部の子か、同僚の先生方が「青山先生」と呼びます。



KLACK(ナワトビ)のゲームです。また一人一人が抱えている問題が違うので、どのように接していけばよいのかを悩みながら楽しんでいます。

あじさい日誌

7月9日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

7月12日 午後2時から大倭会主催の祓会が開かれました。この日初めて兵庫県豊岡市の土野優輝さんが参加されました。今回のテーマは「ツミ」について語り合いました。

7月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。大阪府河内長野市の金澤秀朗さんに案内されて寝屋川市の大原恵美子さんと北葛城郡の廣西直子さんが参拝されました。

7月23日 午後2時から大倭大本宮の月次祭が行われました。この日は昭和38年7月23日の法話をお聞きました。

午後4時から大倭会館で大倭会の役員会が開かれました。午後5時から教務本庁で本紙『おおやまと』の編集会議が開かれました。

7月24・25日 東方の碑の南側、須賀の道に面する斜面の「法面崩落防止対策工事」が大倭殖産(株)によって行われました。

7月27日 大阪府河内長野市の金澤秀朗さんに案内されて4名の女性が大倭神宮と紫陽花邑を訪ねてこられました。

7月28日 拝殿のエレベーターの定期点検が行われました。

8月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では7月27日 午前10時半より新入職員研修会が開催されました。今回は、珍しく1名だけの対象者でしたが、じっくり勉強できたのではないかと思います。

8月6日 夏の時期ではめずらしく奈良市の指導監査が行われました。対象施設は、菅原園、茂毛路園でした。

(菅原園)

7月7日 七夕ということ、昼食にそうめんと、おやつにブッセと紅茶を皆で頂きました。短冊飾りなど当日までに職員と一緒に作ったものを眺めたり、七夕の歌を唄ったりお話をしたりと楽しく過ごしました。

7月30日 午後から交流ホールにてお誕生日会を行いました。皆で誕生日の歌を歌い、目の前でケーキがデコレーションされる様子を職員も一緒に楽しみました。ケーキが完成すると、皆で「おめでとう」と声を合わせてお祝いしました。最後に和やかに皆でケーキを味わいながら、心温まるひとときを過ごしました。

(須加宮祭)

7月11日 花や野菜の苗を植え、1カ月が経ち、花が咲き始め野菜も少しずつ出来始めました。

た。利用者で花の水やりが日課になっている人もできてきました。

8月3日 なすびが出来たので、なすびの収穫を行いました。花や実が出来ている野菜を見て喜ばれる方もおられます。

(長曾根寮)

7月11日 (特養)フロアにて納涼祭として職員による手作りのかき氷や職員数名の浴衣姿でお祭りの雰囲気を楽しみました。7月23日 (デイ)フロアに提灯を吊り、皆さんに半被を着てもらい、お祭りムードの中、模擬店を楽しみました。

(茂毛路園)

7月7日 午後より1階あじさいホールで七夕の集い「ピアノでうたおう」を開催しました。前半は、七夕の笹に皆で書いた短冊を飾りつけ、それを見ながら七夕にちなんだ歌をピアノの演奏にあわせて歌いました。後半には2グループに分かれて七夕にちなんだミニゲーム(うちわで星パタパタゲーム)を実施し、楽しい時間を過ごしました。

紫陽花邑の環境整備

——土手の整備と

瑞光院の照明——

紫陽花邑の環境を保つために以前から少しずつ整備が進められていますが、今回は2つの事

柄を報告してきます。

東方の碑の南側の道路に面した土手の整備工事が大倭殖産(株)によって施工されました。法面の崩落を防ぎ、草刈り等をする際の安全を図ることが目的です。写真のようなスッキリとした状態になりました。



スッキリした現在の土手

倭神宮にて。
この日は昭和25年に帰幽された妙月母さんのご命日でもあります。

*大倭会祓会

9月13日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)

9月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)

9月23日(水・祝) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

表紙写真に寄せて

猛暑お見舞い申し上げます
広島県豊田郡大崎上島町

中本 好子

2026年夏、西日本広島は連日の猛暑で瀬戸内の海水温は高く、漁船もほとんど停泊していることが多い。

6月の頃、あんなににぎやかに鳴いていたセミ達も今は沈黙している。

車の往来もごくわずかで、アスファルトの照り返しは強く猛暑を物語っている。

毎日の食事作りや諸々の生活のことでは過ぎていく中、法主さんのもと、おおやまとに集う皆さんと共にありたいと願いながら今を生きている。

写真の左端に見える煙突は長島中国電力「石炭火力発電所」。大崎上島の島嶼部にあり、長島大橋で結ばれている。

あんない

*月次祭(大倭神宮)
9月6日(日) 午後2時より大